

『An Overview of Self-Determination Theory and Its Relevance to Social Problems』  
『自己決定理論の概要と社会問題との関連について』

講演者: Edward Deci, Ph.D. (University of Rochester)

司会者: 若島孔文(東北大学)

【基調講演コンセプト】

臨床心理学を含む心理学の長い歴史の中でも間違いなく5本の指に入る学者だ、という研究者も少なくありません。今大会の基調講演では、いわゆる「基礎的研究」の知見を、日本の社会・臨床的な問題の解決に適用できないかディスカッションする試みを行います。臨床心理学といわゆる「基礎研究」の架け橋、これが今大会の臨床心理学に対する提案のひとつです。東北大学は、教育心理学にて実験心理学研究が盛んだった歴史を持ち、臨床心理学講座においても、心理学で伝統的に用いられてきた方法—調査、実験等を臨床研究に適用してきました。

同時に臨床の実際場面においては、それらの伝統的方法と同時にナラティブベーストな視点やいわゆる勤や骨というものも決して相反するものではないと考えています。現在の私たちの実験や調査に対するスタンスは、「共同主観」という術語を使えば、その形成のための共通言語のひとつという視点です。

基調講演は、1)Self-Determination Theory について概要を紹介していただき、2)不登校・引きこもり問題に対する支援への示唆について、不登校・引きこもり研究と支援の第一人者である若島孔文氏とのディスカッションを行う、という2部構成で行われます。



**Key Note Lecture Abstract**

Throughout the history of research on motivation, most approaches have treated motivation as a unitary concept—that is, one that varies in amount but not kind. People have been viewed simply as having more motivation or less.

Self-determination theory (SDT) differentiates types or qualities of motivation rather than focusing only on the amount of motivation. Central to the theory is the distinction between autonomous and controlled motivation. Autonomous motivation involves acting with a full sense of volition and choice, and it encompasses both intrinsic motivation (acting because one is interested in an activity) and well-internalized extrinsic motivation (acting because the activity is important for one's values and goals). Controlled motivation, in contrast, involves acting with a sense of pressure or demand and includes regulation by external contingencies and by contingencies that have been partially internalized.

SDT has focused much of its research on interpersonal conditions that promote autonomous versus controlled motivation. The work has included laboratory experiments and field studies in various life domains which have confirmed that social contexts that support satisfaction of the basic psychological needs for competence, autonomy, and relatedness facilitate autonomous motivation and, in turn, greater well-being and amelioration of psychopathology and social problems. The presentation will review the development of SDT and the history of its research, giving special attention to the application of the basic theory for addressing social pathology.

**Biographical Sketch: Edward L. Deci**

Edward L. Deci is Helen F. and Fred H. Gowen Professor in the Social Sciences at the University of Rochester. He holds a Ph.D. in psychology from Carnegie-Mellon University and was an interdisciplinary post-doctoral fellow at Stanford University. For more than 40 years Deci has done research, much of it in collaboration with Richard M. Ryan, on self-determination theory. Deci has published ten books, including: *Intrinsic Motivation* (1975); *Intrinsic Motivation and Self-Determination in Human Behavior* (co-authored with R. M. Ryan, 1985); and *The Handbook of Self-Determination Research* (co-edited with R. M. Ryan, 2002).

## 基調講演 2 (Key Note Lecture 2)

9月4日(土) 13:30~15:30  
東北大学川内萩ホール

### 『From the Schizophrenogenic Mother to the Genotypic Vulnerability: A Review and Update on the Theme "Schizophrenia and the Family"』

『統合失調症を引き起こす母から遺伝的脆弱性へ:「統合失調症と家族」研究とのレビューと現在』

講演者: Carlos E. Sluzki, M.D. (George Mason University)

司会者: 長谷川 啓 三 (東北大学)

#### 【基調講演コンセプト】

「統合失調症と家族」というテーマは、精神医学ならびに臨床心理学他、関連多領域において、いまだ議論の尽きない課題であり続けています。とりわけ、1956年に発表された Gregory Bateson プロジェクトチームによるダブルバインド理論は、非常にセンセーショナルな発表でありながらも、さまざまな論議とともに批判も多く受けてきました。Carlos E. Sluzki, M.D.の功績の一つは、このダブルバインド理論の整理といえます。そのかわりには精神分析にはじまり、家族療法そして、地域に根差した支援へと及んでいます。本基調講演では改めて、現代における「統合失調症と家族」の研究について、総合的に問い直す機会としたいと思っています。

#### 【基調講演要旨】

「統合失調症を引き起こす母」とは、Freida Fromm-Reichman が、1940年代後期に、その臨床経験に基づいて導いた精神力動的仮説である。その後、1950年代 Gregory Bateson とその共同研究者が、サイバネティクスとコミュニケーションの視点に基づく、「ダブルバインド」仮説を提出した。

ダブルバインド仮説は、統合失調症患者の治癒に劇的に魔法のような効力を発揮したわけではないが、家族療法および短期療法において認識論的転回をもたらし、理論的基盤を拓いた。それらは特に、コミュニケーション派あるいはサイバネティック派、さらに戦略派、システム派と呼ばれることになった。

一方、新しい臨床および研究プロジェクトが異なる角度から、家族と統合失調症の精神分裂症の謎に挑んできた。ひとつは、“Expressed Emotions”研究および実践の流れである。これは、どのような相互作用のスタイルが、統合失調症患者の一連の治療に肯定的あるいは否定的に影響するかを明らかにするものであり、さらに重要な点は、心理教育的アプローチを通じて、いかに養育のスタイルが肯定的に変化されるかを明らかにしたことにある。

もう一つは、Lyman C. Wynne と Pekka Tienari による大規模な縦断研究の流れで、“high risk adopted away”アプローチである。これは、新生児期に養子に出された、「統合失調症を引き起こす母」(統計的に統合失調症にとって「ハイリスク」)の子どもの生涯を追跡し、疾患ありの子ども群と疾患なしの子ども群の、その後と発症の可能性を比較したものであった。ハイリスク群およびローリスク群の追跡調査および養子家族の相互作用的特徴に関する研究から、どのくらい遺伝的リスクが、養子家族において出自家族の性質に依存するのか、あるいはしないのか、その傾向が明らかになった。

最後に、目下注目されている、集約的な地域指向のプロジェクトについて論じる。これは、個人にアプローチするだけでなく、コミュニティ教育と家族という視点から発想するアプローチで、精神疾患症状による破壊的なダメージの一次/二次予防に顕著な効果を示している。

これらのアプローチはそれぞれ、その哲学や方法論の点で明確に異なっている。しかしながら、これらはお互い相互補完的なものであり、ある方法と別の方法が、家族と統合失調症の研究および臨床領域の理論ならびに実践の最前線を構成しているのである。

#### 【Carlos E. Sluzki 博士略歴】

アルゼンチン出身。University of Buenos Aires School of Medicine で医学博士の学位を取得。精神分析のトレーニングを受けた後、60年代中頃、当時黎明期にあった家族療法の拠点である Mental Research Institute (MRI)においてトレーニングを受ける。UCLA 始め、大学の精神科教授を歴任し、現在 George Mason University 教授。1980年~83年には、MRIのディレクターをつとめる。また、Acta Psiquiatrica y Psicologica de America Latina, Family Process, American Journal of Orthopsychiatry の編集長を歴任し、多くの世界的学会組織における名誉会員。世界中で、主に家族療法、ソーシャルネットワーク、暴力と犠牲、難民と人権をテーマとした、多くの基調講演やパネルプレゼンテーションを精力的に行っている。

